

作手高原の地形

新城市の作手地域は、標高500~700mのなだらかな高原になっています。三河高原の中でも最も高くなっており、作手高原と呼ばれています。ここから西へ次第に高度を下げて、西三河の低地へとつながっています。なだらかな地形は、浸食が進んで地表のどこもこが小さくなり、ついに海面近くで平坦になったもので、準平原といえます。三河高原は白亜紀以降の浸食で準平原が形成された後、約260万年前頃から隆起を始め、現在のような高さの高原になりました。

作手高原の中間湿原

まわりを600~700mの山々に囲まれ、盆地状の地形の中央部に水が集まり、南北に広がる湿原が形成されました。

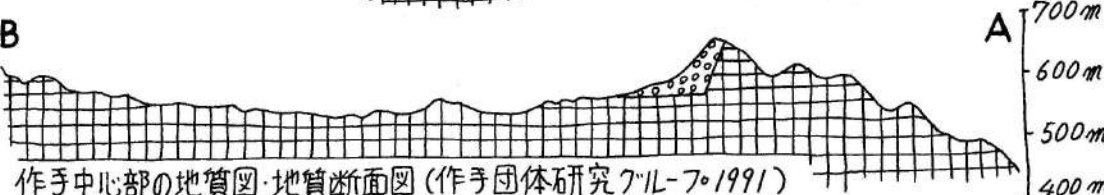
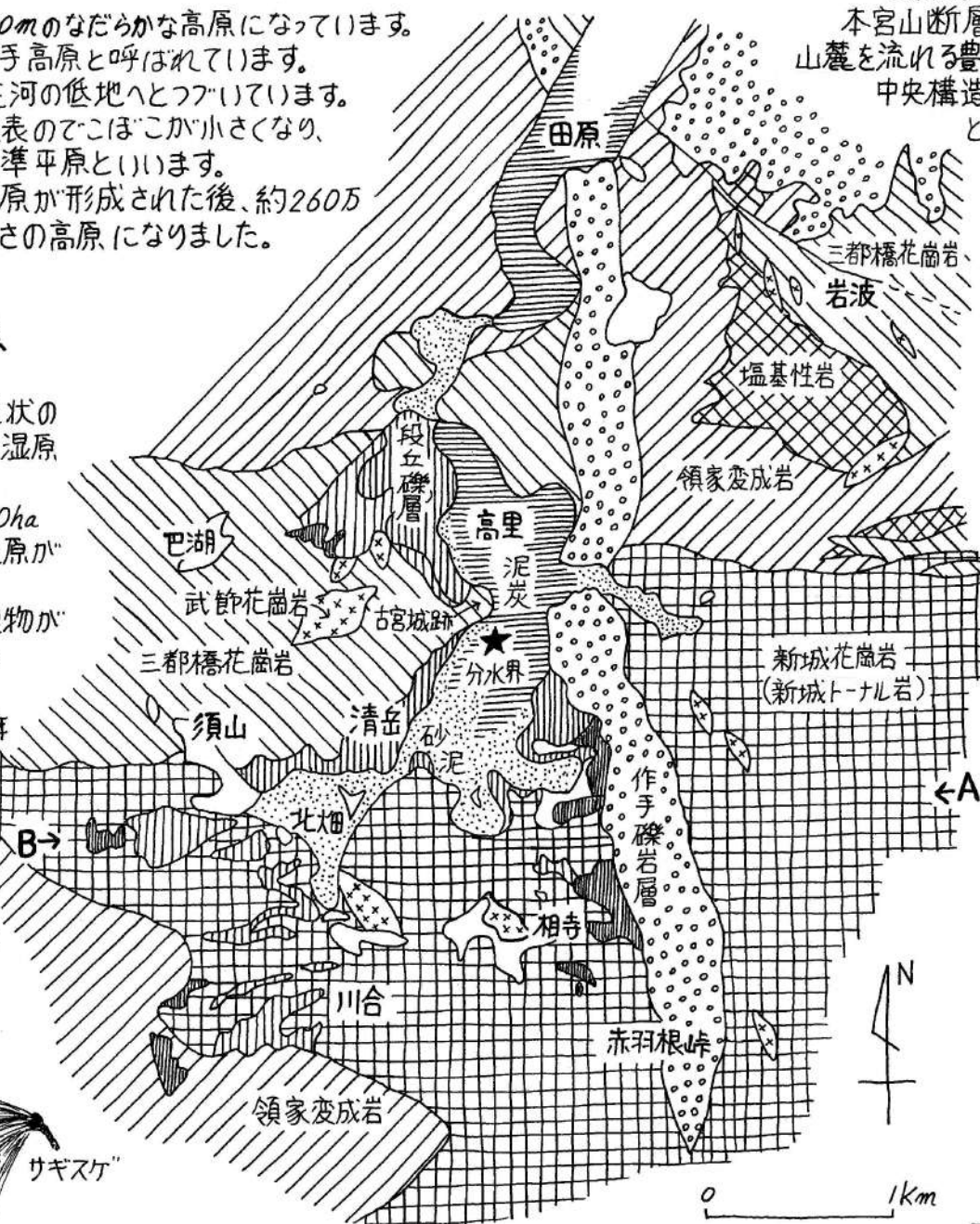
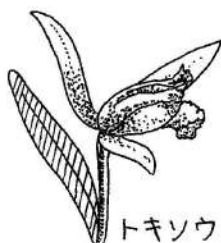
現在は水田になっていますが、かつては50haともいわれる、大野原と呼ばれた広大な湿原がひろがっていました。

夏季の低温と多雨の条件で、繁茂した植物が半腐植状態のまま堆積を続け、長い年月をかけて泥炭を形成しました。

泥炭層の形成開始時期は約32,000年前とされ、約3,000年前頃まで泥炭が形成されていたようです。

現在は長ノ山、鴨ヶ谷、清岳向山、黒瀬庄ノ沢などの湿地・湿原が残されています。

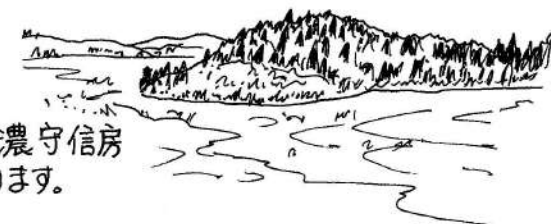
作手高原では、低層湿原から高層湿原に移行する中間湿原が見られます。愛知県で数少ない泥炭湿原で、泥炭層は深さ2~3mに達する場所もあります。



作手高原の東端は、東北東から西南西に直線的な急斜面の崖をつくっていて、本宮山断層崖と呼ばれています。山麓を流れる豊川付近を中央構造線が並行してとおっています。

湿原に浮かぶ城・古宮城

湿原(現在は水田)に半島のように突き出た場所にあります。武田氏の三河侵攻の拠点となった城です。湿原に囲まれ、二重の濠を掘った名城でした。戦国時代の名将、馬場美濃守信房による築城といわれています。



谷中分水界

作手清岳の水田地帯に豊川水系と矢作川水系に流れが分かれる平地の分水界があります。隆起準平原では、山の尾根ではなく、谷の中に分水界ができることがあります。ここでは北の流れが矢作川水系の巴川、南への流れが豊川水系の巴川となって三河湾へ注ぎます。



大昔、大きな川が流れていた

作手高原には礫岩層が南北に細長く分布しています。作手礫岩層と呼ばれ、川で運ばれた大きささまざまな丸い礫が見られます。時代はよくわかりませんが、前期更新世のある時期、三河高原一帯は標高も低く、北方から大きな川が流れてきていたと考えられます。

